

Yearly Digest

2021/4 - 2022/3

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 令和3年度の主な事業活動の実績

未来を、拓こう。

スポーツのちからで。
挑戦するところで。

チャレンジ支援

スポーツ体験促進

2021年度
トピック

新中期事業方針「Value 5」を策定

～独自性の高い「スポーツ振興／未来人材成長モデル」を構築～

中期事業方針「Active 5」の最終年にあたる2021年度は、2022-2026年度の5か年計画となる新中期事業方針の検討・策定を行いました。新中期事業計画「Value 5」では、基幹事業の目的や位置づけをあらためて検討・再編するとともに、それらをつなぎ合わせた「スポーツ振興／未来人材成長モデル」と、新たなスローガン「未来を、拓こう。～スポーツのちからで 挑戦するところで～」を策定しました。

スポーツチャレンジ助成事業

スポーツチャレンジ助成

TOKYO 2020開催年。YMFSチャレンジャーも躍進！

スポーツを通じて世界に羽ばたく逞しい人材の育成を目的とする本事業は、2021年度（第15期）チャレンジャーとして30名を助成。成長プロセスを重視する独自のサポートプログラムによって、それぞれの夢・目標の実現を支援しました。

個々のチャレンジを総括し、成果や課題を共有する「第15回YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」は、2020年度に続いて代表者による会場出席とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催。プログラムを集約したワンデー開催としながらも、活発な意見交換と交流により充実したミーティングとなりました。

また、東京オリンピック・パラリンピックには合わせて7人のOB・OGチャレンジャーが出場し、第11期生の梶原悠未選手（自転車競技）が銀メダルを獲得したほか、北京オリンピックでも第14期生の堀島行真選手（モーグル競技）が銅メダルを獲得しました。



コロナ禍の影響を受けながら、果敢に目標の達成にチャレンジした第15期生



スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングは、2年連続となるハイブリッド形式で開催



東京2020に出場したOB・OGチャレンジャーの慰労会を実施。山本篤選手らが大会の様子を報告



成果報告会で優秀賞を受賞した川島将人さん

スポーツチャレンジ体験事業

ジュニアヨットスクール葉山

コロナ対策による休校を経て、スクール活動を再開

心身ともに健全で逞しい子どもたちの育成のために通年型のヨットスクールを運営しています。2021年度は33名のスクール生を対象に毎月2回の指導を行いました。首都圏を中心に緊急事態宣言が発令される中、5～9月の5か月間はスクール生や指導者の安全を優先して休校としました。一方、通常講習以外の活動として複数のスクール生が各種の競技会に参加しました。OPナショナルチーム選考会には2名が参加し、ともに優秀な成績を残して海外レースへの派遣が決定しました。



感染防止対策を徹底して10月からスクールを再開



10月以降は策定したコロナ対策指針に則ってスクール活動を再開



スクールで使用するテキストを刷新



修了式。卒業生には10年間通ったスクール生も

第30回セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖

参加者の安全を最優先し、3年連続の開催中止

毎年春休みに開かれるジュニア/ユース世代のセーリング大会として定着している「セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖」は、今年度第30回の記念大会として開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、参加者の安全を最優先して開催中止としました。コロナ禍による大会の中止は3年連続となりました。

スポーツくじ



※大会中止のため、2021年度は（独法）日本スポーツ振興センターのくじ助成金交付はなし

スポーツ教材の提供

全国120の幼稚園・学校・団体にスポーツ教材を提供

子どもたちのスポーツ機会の充実を目的に、全国の幼稚園、小学校、特別支援学校等を対象に展開している「スポーツ教材の提供」に、2021年度は772件（前年度657件）の応募が寄せられました。4月28日には（公財）日本スポーツ協会の泉正文副会長による厳正な抽選会を行い、当選した計120の幼稚園や学校、団体にポッチャセット、タグラグビーセットを提供しました。

教材の提供先には活用報告書の提出を求め、模範的な活用事例については当財団ホームページで紹介し、社会啓発に努めています。



（公財）日本スポーツ協会の泉正文副会長による抽選会

ラグビー体験会 はじめてのラグビー教室

みんなでパスをつなぐ「はじめてのラグビー教室」

子どもたちのスポーツ機会の充実を目的に、静岡県西部の3市1町の小学校をモデルに実施している指導サポート付きスポーツ教材の提供「はじめてのラグビー教室」を、ヤマハ発動機（株）の協力を得て2021年度は掛川市立佐東小学校で実施しました。当日は4年生（20人）、5年生（20人）、6年生（21人）の合わせて61人が5・6時限の授業で汗を流しました。同校の三浦善友教頭は、「本物のラグビー選手から指導を受け、身体の大きさ、パワーやスピードに驚き、子どもたちや教員のモチベーションが高まった。ラグビーは、自己犠牲の精神やチームワークを身に着けるのに効果的」と、その手応えを話しました。8年目となるこの活動の実施は、累計45校となりました。



掛川市立佐東小の授業で実施

第33回全国児童 水辺の風景画コンテスト

全国の幼稚園・学校・団体から応募総数18,507点

自然の中で発見・体験したことを表現する絵画コンテストです。自然体験の機会を創出するとともに、絵画を通じて豊かな感性を育むことを目的に実施しています。本年度は全国の幼稚園・小学校・団体等から18,507点の作品が寄せられ、入賞作品23点と入選作品353点を決定しました。審査員長代理を務めた国広富之さん（俳優・画伯）は、「水辺でのさまざまな体験と創作活動にそれぞれチャレンジがある。コンテストに応募することで、子どもたちの意識をさらに一段高めることにもつながっている」と講評しました。

なお入賞作品は、当財団のウェブサイトで紹介するとともに、ジャパンインターナショナルポートショー2022の会場に展示されました。

- 協賛：Love the Earth 実行委員会、三井住友海上火災保険株式会社、マルマン株式会社、株式会社ワイズギア
- 後援：文部科学省、国土交通省、環境省、農林水産省、一般社団法人日本マリン事業協会、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟、NPO法人ジャッパンゲームフィッシュ協会、一般社団法人日本マリーナビーチ協会、独立行政法人国立青少年教育振興機構、一般財団法人日本海洋レジャー安全 振興協会



4作品の大臣賞表彰式を幼稚園や小学校で実施



史上最多の18,507点を審査

ユニバーサル・スポーツ体験会 チャレンジ！ユニ★スポ

特別支援学級のある小学校11校で体験会を開催 学術調査によって、その成果を確認

2019年にトライアル事業として開始した「チャレンジ！ユニ★スポ」は、障害者スポーツとして生まれた競技を楽しむユニバーサル・スポーツの体験会です。スポーツを通じて多様性を深める機会として、2021年度は特別支援学級のある静岡県内の小学校11校で開催し、合わせて911人（児童生徒870人、教員41人）が参加しました。東京パラリンピック2020開催前後の実施とあって、どの学校でも生徒たちの高い関心と積極的な姿勢が伺えました。

本事業は、学術調査を兼ねて開催しており、体験会の前後にアンケート調査を実施しています。2020年度のアンケートを分析した結果、「障害のある人と仲良くできる？」「障害のある人と一緒にスポーツできる？」「一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれるそう？」の問いに対し、すべて体験会の実施後（直後／数か月後）にスコアが上がる事が確認されました。



学術調査を兼ねて11校で開催

スポーツチャレンジ啓発事業

第14回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

日本のスポーツを支える「縁の下の力持ち」を表彰

スポーツ振興において多大な実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した「縁の下の力持ち」（人物・団体）を表彰しています。第14回スポーツチャレンジ賞は、障害のある子ども向けスイミングクラブの運営を通じて「誰もが楽しく学べる機会」を提供し続ける伊藤裕子氏を功労賞に、またサッカー1級審判員・女子国際主審としてスポーツ界における女性活躍を牽引した山下良美氏を奨励賞に選出しました。両氏のチャレンジの足跡や功績は、今後、当財団のウェブサイト「BACK STORIES」にて紹介します。

●後援：公益財団法人日本スポーツ協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本パラスポーツ協会 日本パラリンピック委員会



功労賞受賞の伊藤裕子氏



奨励賞受賞の山下良美氏

調査研究

「障害者スポーツ」と「トップスポーツ」の調査研究を進展

「障害者スポーツプロジェクト」と「トップスポーツプロジェクト」の2つの分野で調査研究を進めました。障害者スポーツプロジェクトでは、①障害者スポーツ選手のキャリア調査、②テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査、③パラリンピアンに対する社会的認知度調査、④ユニ・スポーツ体験での児童の意識変容調査を実施し、それらの結果を調査報告書としてまとめました。12月には網本麻里氏（車いすバスケットボール日本代表選手）、千葉絵里菜氏（元NHKリポーター）、鉄谷美知氏（共同通信社運動部記者）、山本篤氏（プロ陸上競技選手）をパネリストに迎え、オンラインによるシンポジウム「パラリンピック報道とパラリンピアン認知度における社会発信の変化」を実施しました。一方、トップスポーツプロジェクトでは、トップスポーツクラブの存在を地域におけるスポーツ振興につなげるため、トップスポーツチームが存在する全国6都市の地域住民の意識調査結果をまとめ、ウェブサイトで公開しました。



情報発信

新中期事業方針に合わせてリニューアル

新中期事業方針の策定と合わせ、当財団ウェブサイトの検討を進めました。「わかりやすい情報発信」を目指して改訂したウェブサイトは、2022年度より運用開始しています。

掲載情報の詳細については、ウェブサイトをご覧ください。

www.ymfs.jp

